京都広告協会70周年記念事業
これからの30年 メッセージ募集

優秀賞

山本美和 「消費」から「継承」へ

私は京都に住まう者ではない。遠くからこの古都を愛する一人の旅人として、これからの三十年に向けて私はこう願う。観光客がただ押し寄せるのではなく、街の文化を守るための「支え手」として循環する仕組みが、もっと当たり前になってほしい。例えば、宿泊税や伝統工芸の維持に直接つながるデジタルパスポートが浸透し、訪れる人が誰しもこの街の「継承者」の一人になれる未来だ。便利さや効率化が進んでも、路地裏に漂うお香の香りや、石畳に響く足音の美しさだけは変わらないでほしい。

ここからは、そんな未来を見据えた、私にとっての三十年後の回想だ。

「二〇二五年に初めて観光で足を踏み入れたときは、あふれかえる人波に圧倒され、古い社寺の静けさを味わう余裕すらなかった。だが、二〇五六年の今、街はスマートな変貌を遂げている。あの頃、混雑の象徴だった清水寺の参道は、時間帯ごとの入場分散システムや、静寂を楽しむ『プレミアム・タイム』の導入によって、かつての過剰な喧騒が嘘のように穏やかになっていた。行き当たりばったりの『消費する観光』から、歴史や文化を『深く体験し、共有する場』へと、街と旅人の関係が見事にシフトしていたのだ」

観光とは非日常を消費することではなく、その土地の歴史や命の営みに敬意を払い、共に未来へバトンをつなぐ行為であるべきだ。次の三十年、私たちが選ぶ旅のあり方がこの美しい古都の明日を形作る。いつの時代も京都は人の心を優しく受け止め、未来へ続く物語を紡ぎ続けてくれると、私は信じている。